

司

本日の学び：「福音に共にあずかる」 テキスト：第一コリント9章19-27節

【理解の手がかりとして】

「わたしは、だれに対しても自由な者です」(9・19)とパウロは言う。では、「自由」の反対は何か。それは「束縛」、つまり何かに制限されている状態、言わば奴隷状態というのが「自由」の反対である。しかしどうだろう。パウロは不可思議なことを言う。「わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました」(9・19)と。これは一体どういうことなのだろうか。

パウロが論じている相手の状況を考えてみよう。コリントの教会内で起きた「偶像への供え物」を巡っての問題、それは、ある立場(22節の「弱さ」と反対の強い立場の信仰者)に立つ信仰者が、「自由」をコリント社会での市民的な自由や哲学的な意味での自由と同様だと間違っ理解し、自分の権利主張を譲らず、信仰的立場の異なる人々への配慮に欠けた振る舞いをしていたのである。そういった人々に対してパウロは、キリストによって与えられる「真の自由」とは、全ての人の奴隷、すなわちすべての人に「仕えること」である、と教えているのである。

一方、パウロは今やキリストの愛に捕らえられた真の自由人である。キリストの僕として、それまで自分自身を縛っていた様々な価値観から全く自由にさせられていた。律法の一点一画を規律正しく守ることによる行いの義を積み重ねていくこと、そうやって神の救いを獲得しようとした古い自分には全く別れを告げていた。それはまた自分に対してだけでなく、他者に対しても、その律法の物差しで他者の義を判断することなどから全く自由にさせられていた。そうパウロをなさしめたのは、主イエスの愛であり、十字架による救いであった。

主イエスはすべての者達を救うために、裁きではなく「赦し」を、ご自身の死を通して与えて下さった。パウロはその主イエスの愛に捕らえられている僕である。だからパウロにとって、キリスト信仰の自由(律法からの解放)を盾にとって兄弟たちを傷つける人たちの振る舞いは大変愚かなことだと思われた。パウロを全ての人々への奉仕の務めへと導くのは、キリストによる愛の自由である。愛はまず相手を包む。彼はユダヤ人に対してはユダヤ人のようになり、異教人(律法を持たない人)に対してはユダヤ教の律法から解放された者のようになった。

しかし誤解してはならないのは、彼が「ユダヤ人のようになり」「律法に支配されている人ようになる」ということは、キリストに救われる前の彼に戻ることは決してない。彼はそれからすっかり解放されている。ここで大切なのは「ユダヤ人のようになった」あるいは「律法を持たない人ようになった」(9・20)であって「ユダヤ人になった」あるいは「律法を持たない人(異教人)になった」ということではないということ。その目的は、それはユダヤ人、そして異教の人々を「救うため」(9:22)であった。

「すべての人に対してすべてのものになる」(9・22)とパウロは言う。それは主イエスの福音を届けたい、その一心であった。パウロは「それはすべての人を救うため」とは言わない。彼の言い方は少し控えめ。「何とかして何人かでも救うため」(9・22)と。せめて、数人でも救うことが出来たならば……。私たちはこのパウロの願いを、大変な近しさを持って感じる事が出来る。「あの人にイエス様に出会って欲しい」「救われて欲しい」という具体的な祈りを私たちは持っている。「福音に共にあずかる」(9:23)

ということ、クリスチャンの喜びはこのことに尽きるのではないだろうか。次の言葉を心に刻もう。「福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです」(9・23)。

24 節以降でパウロが語っていることは、運動競技の特徴である「賞を受ける」ことを目指す、ということ。オリンピアの競技において賞は月桂冠(栄冠)であったが、それを受けるのはただ一人だった。そして競技に参加するからには、誰もがその賞を目指して走った。パウロはそれを信仰生活になぞらえて教える。信仰者として生きるからには、ただ目的もなく歩くのではなく、明確なゴールを目指して、そこで与えられる冠(永遠の命)を目指して、しっかりと走ることが求められているのだ、と。

運動競技に参加し賞を目指す者は皆、そのために節制をする。節制とは、競技のため心身に悪いことを我慢し、慎み、積極的に自分を訓練する、自分を律して厳しい練習に励むということ。メダルを取る選手の華やかな競技の陰には、長い地道な厳しい訓練がある。信仰の歩みにおいて私たちも、ある意味でそれと同じように、自分をしっかりと律して、訓練し、節制をしていく必要がある。

このように信仰と運動競技とは似たものである。しかし完全に同じではない。それは、運動競技において賞を得るのは「一人だけ」だが、信仰においてはそうではない。ここでパウロが強調したいのは、競争・比較でなく、自己の鍛錬である。私たちの信仰の歩みは、他の人との競争ではない。他の人と比べて、どちらが信仰において優れているか、信仰の理解と実践が優れているか、ということを経うのではない。

ある意味、当時のコリントの教会はそのような比較・競争に明け暮れていた。パウロが求めるのは、そのようなことではない。パウロは26 節で「拳闘」(ボクシング)のことをも語っている。ボクシングほどストイックに節制する競技はない。パウロはここで「空を打つような拳闘はしない」と言っている。つまり、ちゃんと相手を見定めて打つのだ、と。では、その相手とは誰か。それが次の27 節に語られている。「むしろ、自分の体を打ちたたいて服従させます」と。つまり信仰のボクシングにおいて、見定めて打つ相手とは、他人ではなくて自分なのである。それが、先程の「節制」である。自分の内にある思いや欲望を制御して、信仰における正しい道を歩むことができるように自分を鍛える、そういう節制が教えられているのである。信仰の競技生活は、徹頭徹尾、自分自身と戦っていくことである。

最後に、全ての人に対して相手のようになる（相手の価値観を尊重して応対する）ことは決して簡単ではない。自分の義が立ち過ぎると、または自分の義を立証（確認）するために、相手をつい裁きたくもなる。相手の存在性に対する尊重（敬意）を示す、それが愛することの基本条件ではないだろうか。

『聖書教育』より

- 「『朽ちない冠』（9:25）に向かって精いっぱい走る一人ひとりが、愛し合い、支え合い、『福音に共にあずかる』（9:23）ことを、パウロは情熱をもって願いました。」（聖書の学び～真剣に走っていきたい）

【報告・祈りの課題】

1. 世界平和、一日も早い戦争状況の終息、停戦、終戦のために。緊迫するイスラエル情勢のために。
地震の被災者のために。
2. 空調システム更新工事のために（進行中）。教会墓園拡張計画が祝されるように（申込期限4月末）。
3. 神奈川バプテスト連合の諸教会のために～4/28 連合総会（於 当教会）
4. 4/28（主）CS、主日礼拝〈相模原・会堂（宣教:吉田牧師）〉、神奈川連合総会
5. 当教会第78回定期総会（5/26）の準備のために～標語「キリストに結ばれて、共に歩むわたしたち」
6. その他（個々人の祈りの課題）

--